

H29年度 中間評価・実行可能性調査（FS）評価（案）一覧表

【ソフト分野・中間評価】

（H27採択・3年目）

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	中間評価 (案) [※]
27-1	2	II	研究名	災害・日常時の道路の信頼性とその総合・長期的評価の研究開発：幹線道路ネットワークデザインと維持管理計画	金沢大学 教授 中山 晶一郎	15,830	B
			概要	災害・日常時の両方で信頼性の高い道路ネットワークの整備を目指して、連結・時間信頼性を考慮した総合的な便益評価法を実用化し、それを用いた道路ネットワークデザイン手法を提案する。そのために、道路施設の脆弱性評価や通常時旅行時間変動の推定などの要素技術を開発する。また、長期にわたり信頼性を確保するためにその維持管理計画策定法も提案する。			
27-2	3	II	研究名	多様な観測データの活用による道路情報提供の研究開発	山梨大学 大学院 教授 佐々木 邦明	11,000	A
			概要	多様な観測データが利用可能になってきたことを活用し、観測データを援用した道路や空間の状態変化を高精度に予測できる交通シミュレーションの開発を目的としている。状態変化とは、短期の経路別の需要変化や、ゾーンの時間帯別滞在人数、事故等のイベント検出等を指し、これらの予測結果を活用して情報提供およびマネジメントを支援する。			

（H28採択・2年目）

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	中間評価 (案) [※]
28-1	-	IV	研究名	ETC2.0 プローブ情報等を活用した“データ駆動型”交通需要・空間マネジメントに関する研究開発	東京工業大学 准教授 福田 大輔	31,760	A
			概要	長期かつ広域で観測される ETC2.0 プローブ情報等の交通関連ビッグデータを、マルチスケールの多様な交通モデルと有機的に結びつけることで、交通政策のエビデンスベース評価を可能とする“データ駆動型”交通需要・空間マネジメントに関する研究・技術開発を行う。また、首都圏、北海道、沖縄を対象として提案する各手法の社会実装（調査・分析・政策評価フレームの構築）を行い、各種交通社会実験の詳細検討に資する知見を提供する。			

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29 委託額 (千円)	中間評価 (案)※
28-2	-	IV	研究名	蓄積車両軌跡データの効率的活用のための階層型データベースの構築	神戸大学 教授 井料 隆雅	36,860	A
			概要	近年蓄積が始まっている車両軌跡データの潜在価値は大きい、この種のデータは巨大かつ品質が不安定になりがちであり、ナイーブな方法で扱うと早晚破綻を見る。本研究では、品質を管理し集計単位で階層化された車両軌跡データベースを構築し、その活用例を示す。			
28-3	-	IV	研究名	複数のデータを活用した道路のストック効果の計測技術の再構築	広島大学 准教授 塚井 誠人	41,000	B
			概要	ETC2.0 データから得られる交通状態の質的指標を用いた新たな事故リスクの分析、携帯電話ビッグデータを用いた観光地のトラベルコスト評価、ならびに工業団地等の地価分析を実施して、道路のストック効果算出のための計測技術を再構築する。			
28-4	1	II	研究名	ワンウェイ型カーシェアリングシステムの導入可能性と道路空間の新たな利活用方策についての研究開発	熊本大学 教授 溝上 章志	11,490	B
			概要	再配車を行わないワンウェイ型カーシェアリングシステムの我が国における導入可能性とその効果の検討、ステーション型の場合の最適デポ配置、フリーフロート型とした場合の道路空間の新たな利活用方策などについて調査・研究する。			
28-5	5	II	研究名	アジア都市における「場」の機能を持った道路設計・運用に関する研究開発	横浜国立大学 教授 中村 文彦	7,450	B
			概要	日本を含むアジア都市における交通結節点徒歩圏の道路空間を、都市活動の拠点となる「場(Place)」として改善する設計・運用方法を構築する。そのために 1)現況の利用実態の特徴と課題提示、2)都市活動特性に応じた設計・運用技術提案、3)実証実験による評価を行う。			

(H29 採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29 委託額 (千円)	中間評価 (案)※
29-1	-	IV	研究名	自動運転と道の駅を活用した生産空間を支える新たな道路交通施策に関する研究開発	室蘭工業大学 准教授 有村 幹治	49,507	B
			概要	北海道の農林水産業・観光等を担う「生産空間」では、人口減少によって公共交通や物流の維持が著しく困難化している。本研究は、「生産空間」に住み続けられる道路交通環境を目指し、自動運転や道の駅の活用の実装を含む道路交通施策のあり方について研究開発を行うことで、同様の問題に苦しむ全国他地域への貢献を目指す。			

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29 委託額 (千円)	中間評価 (案)※
29-2	-	IV	研究名	対流型地域圏における自動走行システム普及に向けた新たな道路ストック評価手法	東京大学 教授 原田 昇	49,690	A
			概要	中山間地域の人流・物流ネットワークへの自動走行システムの導入・普及を目指し、道の駅を拠点とする自動運転サービスの実用化を目指した実証実験を通じて、自動運転に対応した道路インフラと地域の小さな拠点となり得る道の駅が有すべき機能を明確化し、自動走行対応型道路ネットワーク整備計画の立案と、ストック評価のためのデータプラットフォーム及び自動走行対応型道路の路線計画評価モデルの開発を行う。			
29-3	1	I	研究名	質の高い交通時代のモビリティの価値の計測手法開発に関する研究	広島大学 教授 藤原 章正	33,500	A
			概要	異なる時間価値や時間制約を持つ移動主体が共生する超高齢社会において、交通の時間価値の計測方法を再構築する。この手法を3つの事例研究へ適用し、質の高い交通時代の道路事業の包括的評価手法の有用性についてフィールド実験を通じて検証する。			

【ソフト分野・実行可能性調査（FS）評価】

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29 委託額 (千円)	FS評価 (案)※
29-4	3	I	研究名	観光流動把握を目的とした交通流動推定システムの研究開発	京都大学 教授 宇野 伸宏	9,990	B
			概要	観光流動の把握を主たる目的とし、ETC2.0、携帯電話系データ、経路探索履歴データなど様々なビッグデータを利活用し、観光トリップを主とした都市内の移動に関して、そのトリップパターンおよびトリップチェーン流動を推定するシステムを開発する。			
29-5	6	I	研究名	交通事故リスクマネジメント手法の研究開発	愛媛大学 教授 吉井 稔雄	9,990	B
			概要	ネットワーク有効活用による安全性向上を目的とし、道路通行時における事故の起こしやすさ(以下「交通事故リスク」)を定量的に評価算定する方法を確立した後、同交通事故リスク情報を活用する交通マネジメント手法を提案・実施して、その有効性を示す。			

※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

※ F S 評価：研究継続の妥当性評価

A: 新規研究として採択	実現性は十分あると評価する。よって、次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
B: 新規研究として採択 (指摘事項有り)	実現性はあると評価するが、研究目標を十分達成するためには、評価者からの指摘事項に留意が必要。次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
D: 不採択	実現性はほとんどなく、研究目標を達成することは困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

【ハード分野・中間評価】

(H27採択・3年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	中間評価 (案)※
27-4	8	II	研究名	薄板モルタルとデータ同化手法を利用したコンクリート橋の3次元塩分浸透予測手法の開発	新潟大学 教授 佐伯 竜彦	11,010	B
			概要	本研究は、飛来塩分環境下にあるコンクリート橋への塩分浸透状況を3次的に把握するシステムを構築することを目的とする。このために、以下の要素技術を開発し、それを組み合わせる。 (1)薄板供試体とデータ同化手法を用いて、飛来塩分量解析の境界条件を同定する手法 (2)(1)を利用し、橋梁全表面における飛来塩分付着量、即ち、コンクリート中への塩分浸透解析の境界条件となる表面塩分濃度を求める手法 (3)環境条件の影響を考慮した不飽和コンクリートへの塩分浸透予測手法 (4)薄板供試体の効率的な製造・貼付け・回収方法			

(H28採択・2年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	中間評価 (案)※
28-6	4	II	研究名	新設コンクリート構造物における表層品質検査手法の確立	広島大学 准教授 半井 健一郎	13,790	A
			概要	これまで直接的な検査が不可能とされてきた、コンクリート構造物の耐久性を支配する表層品質を、非破壊試験の組み合わせによって定量的かつ合理的に評価する新たな検査システムを構築し、道路ストックの長寿命化の推進に資する。			
28-7	6	II	研究名	市街地におけるプロビーム道路照明についての研究開発	北海道大学 教授 萩原 亨	7,200	A
			概要	街路における夜間の横断歩行者事故を防ぐ必要がある。ドライバーによる横断歩行者の発見を早める方策とし、街路におけるプロビーム道路照明を開発する。プロビームとは、車両の進行方向に光を照射する方式である。ヘッドライトと照明協調することで歩行者の発見を早めることが期待できる。			
28-8	8	I	研究名	鋼橋の現位置改良工法の開発	(一社)日本橋 梁建設協会 部長 大野 豊繁	8,290	B
			概要	本研究は、損傷した鋼橋を現在の位置で供用しながら、維持管理がより容易な新構造へと改良する新しい工法を開発するものであり、その特徴は、既設主構造から新設主構造へと耐荷機能を移行することである。工法の適用性、安全性と実用性を実験と解析で検証する。			
28-9	8	I	研究名	市町村のニーズに応える革新的な点検支援システムに関する研究開発	愛媛大学 教授 氏家 勲	16,900	B
			概要	市町村の橋梁点検において、狭小橋梁の点検に伴う通行規制、および点検時の損傷見落とし等が課題となっている。本研究ではこれら課題の解決のため、通行規制を伴わない近接装置および点検支援システムを開発し、狭小橋梁の点検の迅速化、高精度化を同時に達成することを目指す。			

(H29採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	中間評価 (案)※
29-6	-	IV	研究名	生産性向上とライフサイクルコストの削減に資する膨張材併用軽量床版の研究開発	東京大学 教授 岸 利治	13,653	B
			概要	要求性能に応じて膨張材添加量を3段階に設定できる膨張材併用軽量コンクリート床版の開発を行うとともに、単位水量の少ない土木用の配合で軽量コンクリートをポンプ圧送により確実に施工する技術を構築する。			
29-7	-	IV	研究名	耐候性鋼橋梁の診断・補修技術の高度化についての研究開発	山口大学 教授 麻生 稔彦	25,410	B
			概要	本研究開発では、耐候性鋼橋梁の効率的かつ合理的な維持管理を可能とするために、耐候性鋼材の腐食の診断技術および補修技術の体系的高度化を目的とし、診断補修マニュアルの構築を目指す。これにより、耐候性鋼橋梁の維持管理費の縮減が可能となる。			
29-8	4	I	研究名	部分係数設計に向けた塑性化を考慮した鋼桁設計法の研究開発	長岡技術科学 大学 准教授 宮下 剛	27,300	B
			概要	本研究は、断面の一部塑性化を許容した鋼桁の耐力特性を実験および解析により把握することを目的としている。さらに、各国の鋼橋の設計基準を分析し、現在の道路橋示方書では具体的に記述されていない、部材の一部塑性化を考慮した鋼桁の設計法の開発を行う。			

【ハード分野・実行可能性調査（FS）評価】

番号	領域	タイプ	研究名とその概要		研究代表者	H29委託額 (千円)	FS評価 (案)※
29-9	8	II	研究名	リモートセンシング技術を活用した道路土構造物の維持管理の効率化に関する研究開発	東京大学 教授 古関 潤一	22,500	B
			概要	リモートセンシング技術(合成開口レーダー[SAR])を活用し、広域の道路土構造物の変状(軟弱地盤・スレーキング材料による長期沈下、アンカーのり面・深礎杭の変状、管理外の土石流・地すべりなど)について、過去に遡ってデータベースを作成することにより、劣化しつつある道路土構造物の性能・対策優先度を評価し、道路施設の点検・維持作業の効率化を図る			

※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

※FS評価：研究継続の妥当性評価

A: 新規研究として採択	実現性は十分であると評価する。よって、次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
B: 新規研究として採択 (指摘事項有り)	実現性はあると評価するが、研究目標を十分達成するためには、評価者からの指摘事項に留意が必要。次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
D: 不採択	実現性はほとんどなく、研究目標を達成することは困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。